

雁かりを聞きく

韋い

応おう

物ぶつ

故園こゑん渺びようとして  
何いずれの知ところぞ

歸思きし方まさに悠ゆうなる  
哉かな

淮南あいなん秋しゅう雨うの夜よる

高齋こうさい雁かりの来きたるを聞きく

【作者】韋 応物(七三六年〜七九一年?)長安京兆の人、中唐の詩人、若くして玄宗に仕え蘇州の知事となり善政が多く名声を博した。

五言詩に長ず。孟浩然や王維を受け継ぐとされ柳宗元も一括して”王孟韋柳”と並称される。

【語釈】◎秋の夜、雁の鳴くのを聞き故郷を思つての作。

\*故園…ふるさと。 \*渺…はるか。ひろい。水面が広々とほてしないさま。 \*歸思…帰らんとする思い。

\*淮南…淮南河と長江に挟まれた一帯、今の安徽省。 \*高齋…楼上にある書齋。

【通釈】私の故郷は遙か遠くでどのあたりか見分けもつかない、帰らんとする思いはますます深まるばかりで、淮南に秋の雨が降る夜高樓の書齋で雁の鳴き渡るのを聞いている。

【鑑賞】秋になり雁が北から南の淮南あたりに飛んできた。その雁の鳴き声を聞いて故郷を思う作者は北方の出か。雁には便りがつきもの。雁の足に手紙を付けて届けたという故事がある。故郷から便りのないのを嘆いているのだろうか。